

令和5年度収支決算報告書

俳人協会群馬県支部
(令和5年1月1日～令和5年12月31日)

収入の部			
項目		決算額	備考
繰越金		408,528	前年度からの繰越金
会費	76名×2000円	152,000	
収入合計		560,528	

支出の部			
項目		決算額	備考
印刷費	会報 総会資料 各種案内等	17,742	
会議費	役員会等	2,500	コロナ感染防止のため
雑費	俳句カレンダー等	13,650	
通信費	会報郵送料ほか	20,440	
消耗品	短名ラベルほか	11,194	
支出合計		65,526	
収入合計-支出合計		495,002	次年度へ繰り越し

令和6年1月10日
上記のとおりご報告いたします。

支部長 原田清正 会計 吉藤淳子

【会計監査報告】
会計帳簿及び関係書類を監査した結果、適正かつ正確に処理していると認めました。
令和6年1月10日

監査 木下涼薫
監査 吉澤章子

令和6年度紙上総会 感染症予防対策

群馬県は14年ぶりにインフルエンザ警報が発令されるなど感染症が心配な状況が続いています。従いまして昨年同様

集合型の総会は取り止め、会報「やまどり12号」に総会資料を掲載し報告させていただきます。



俳人協会
群馬県支部
☆
発行所
高崎市飯塚町737
TEL027-361-0870

令和6年度
紙上俳句大会開催

令和6年度群馬県支部俳句大会は感染拡大防止対策のため紙上俳句大会といたします。ご理解の上、皆様の奮ってのご参加をお願いします。

- 投句・ 3句 (当季雑詠・未発表句)
- 締切・ 令和6年5月31日
- 投句料・ 無料
- 発表・ 会報「やまどり第13号」紙上
- 選者・ 未定
- 賞・ 上毛新聞社賞・支部長賞ほか
- 投句先・ 〒370-0069
高崎市飯塚町737原田方
俳人協会群馬県支部 あて

ハガキ裏面に俳句、氏名(ふりがな)住所、電話番号を記載の上お申し込み下さい。
※ 一般の方の投句も可。
問い合わせ・TEL027-361-0870 (原田)

- 事業報告(事務局長・武藤洋一)
- 紙上総会(2月)
- 会報の発行(2月、7月)
- 県支部俳句大会(会報紙上)
- 役員会紙上(1月・10月・12月)
- 会計報告(会計・吉藤淳子)
- 別掲報告書の通り
- 監査報告(監査・木下涼薫 吉澤章子)
- 別掲報告書の通り
- 予算案(会計・吉藤淳子)
- 【収入の部】
- 前年度繰越・495,002円
- 会費・70名×2000円＝140,000円
- 収入合計・635,002円
- 【支出の部】
- 通信費・50,000円
- 印刷費・50,000円

- 会費・30,000円
- 雑費・30,000円
- 支出合計・160,000円
- 次年度へ繰越・475,002円
- 事業計画(事務局長・武藤洋一)
- 総会(紙上総会)
- 会報の発行(1月、7月)
- 県支部俳句大会(会報紙上)
- 秋季吟行会(日時、場所未定)
- 支部役員会(随時)
- 人事(支部長・原田清正) 前年度通り
- 明けておめでとう、ございます
皆様のご健康をお祈り致します
令和6年元旦
- 俳人協会群馬県支部役員一同

秋の自由吟行作品集 (無審査・到着順)

佐々木美恵子

茄子漬がお皿の上で紺光り
秋連れて優しい風が頬に触れ
癒されし一日終えて虫時雨

鈴木 乗風

榛名路や暖簾潜りしとろろ飯
初物の葡萄を添へし先づ閑伽へ
鉢杉に秋風涼し嶺権現

矢野間 稲霧

声控へ初鴨織田の大池に
蛤になれぬ雀かこちら向く
冬の山一村囲み黙しけり

笠井 智郁

新涼の眼鏡を外し受くる風
爽籟や天神尾根に雲のなし
菜園の美しき畝大根葉

小林 和子

行くほどに霧のはれゆく上州路
池の面の秋天ひろく水馬
野葡萄の鈴生り杜の大銀杏

佐藤 ヒナ

山粧う立枯蔦をほしいまま
目つむれば色づき初めし野山かな
雁鳴いて浅間のよなを淋しくし

北原 東洋男

端居して夜涼の星とまみゆかな
親下の小暗に咲けり花茗荷
超酷暑地球沸騰の世にあれば

吉澤 章子

霧時雨利尻礼文を隠しけり
さいはてへ向かふ軌道や雁渡る
蒲色の種零しけり蝦夷甘草

吉藤 青楊

朝顔や老犬進む鼻の先
野分逸れ街のそちこちジャズ聞こゆ
榛名山頂松虫草の蒼濃から

福田 昌子

伸びやかな鴉の声や秋うらら
毛の国や畑平らかに冬に入る
風さやか村のはづれの地藏尊

秋天を揺らし土器片洗ひけり

足元の透ける階段夕もみじ

秋さぶや町をあげての美術展

めがね橋の平和をたたふ黄葉かな

綿虫やくろがね色の関所跡

寒竹の子が顔出すや鉄道村

龍潜む淵のむらさき裏妙義

代る代る触れて納得煙茸

落葉舞ふシャンソン館のアプローチ

少年の学ぶ目差水澄めり

伝統継ぎ跳ぬる子獅子や文化の日

夕化粧明けても褪せぬ夢二の忌

言ひたきことカアに託して寒鴉

老農の後どこまでも冬の驚

地の力三階建ての霜柱

シルバーの鼻歌まじり松手入

芋掘るや小さき野鼠走り出づ

曲屋の茅屋根新た小鳥来る

ひそやかに艶めく石段銀杏黄葉

鬼やんま影を残して飛び立ちぬ

裾野だけ見せて赤城山や冬隣

手入れ良き句碑の細道野菊咲く

川音へ蕊を広げて曼珠沙華

願ふこと数多盛られて絵馬の秋

隠世を拜することし床もみぢら

盛り上がる神杉の根や石露の花

コンテナの上にラジオや冬菜採り

湧玉に青き実落つる宮の杜

蚊の群れに出くわす小川さやけしや

波のけずる御座石の辺や赤のまま

里まつり幟ばかりが風に鳴り

石垣に日の匂ひする文化の日

荻原 富江

林 恵美子

大谷 孝子

吉沢美智子

武藤 洋一

大澤 文子

金子 禧子

町田 洋子

真下 章子

木村恵里子

中嶋 孝子

草紅葉水面に空の彩遊ぶ
爽涼の風の抜けゆくめがね橋
うたた寝の背に晩秋の日差し落つ
カセツトに亡き夫のこゑ文化の日
初鳴の影くろぐると夕落暉
小鳥来る杜や小さき水のみ場
水際は色のひとききは秋海棠
身仕舞の美事でありぬ花檜
秋明菊咲かせ秋明菊活けて
秋澄むや神水楓の根方より
源泉に隣る露天湯もみぢ晴
山秋のさ中神橋架け替ふる
築垣の剥落著きそぞろ寒
ゆうれい蜘蛛の潜む石室蛇穴山
道路清掃ズボンに無数のこづち
幹昇りふさふさ垂る野老の花
濡れ縁に栢榴活けある鬼城展
鬼城展みやげは大きな梨の実
小鳥来る硯の大き鬼城展
紅葉なす木々も思ひし不本意と
冬来たる職業欄に何と書く
オレンジ黄蛸も庭を冬の蝶
曼珠沙華百年つづく医家の庭
船算筒床の間に置き神の留守
棒寿司を肴に加賀の秋惜しむ
かぐや姫月に還りぬ秋暮る
ウクライナガザに翔る秋暮る
この球根白い花咲く曼珠沙華
明け暮れに眺む赤城嶺秋惜しむ
晴れわたる赤城連山うす紅葉
野良仕事子に教えつつ冬ごもり
今朝の冬木橋の足らぬ万歩計
小流の香閣伴へる厨口
木犀の香閣伴へる厨口

堀越 純
岩崎 妥江
金子 笑子
石井 昭子
吉藤 淳子
善養寺 玲子
深谷 征子
山谷 三千江
大塚 洋二
深谷 信郎
小菅 さと子
弥城 節子

すべり降る子らの歎声紅葉
晴天の千草あふるる利根堤
健脚の翁と出会ふ鴨の湖
新米や先づ手始めに塩むすび
うみたての卵を買へば冬うらら
炉話やおつきりこみの煮へる音
風抜くる明活の書院竹の春
円墳の裾に尾をふる尉鶴
腰癒えて杖と散歩や木葉髪
木の実落つ翅のごとくに葉を広げ
新蕎麦を捏める翁の力こぶ
紅葉狩立ち寄る道の駅ピエノ
鳥たちの声のにぎやが残る柿
渡り鳥未だ来ぬ湖秋暑し
七十路の淋しさ胸に菊日和
納屋に人頭下げれば案山子かな
秋の薔薇数多の蕾控へをり
わさわさとむらがり掘りて蒟蒻玉
里山にそよぐ白波蕎麦の花
秋澄むや観音杉は空を突く
錦秋や赤いほつぺのバスガイド
遠き日の牧水も見し月見草
山峡の里の空なる星月夜
爽籟や神木雲に秀をゆだね
秋水を注ぎ祓ふる石の蝦蟇
秋の声濡れて琵琶抱く弁財天
群書類従あまた版木に秋の声
鬼城庵疵のかりんも籠盛りに
御捻りも木の葉も飛べり村芝居
綿虫や伏流水の池に舞ふ
鮮やかや実のみ残してななかまど
尼寺の紫陽花抱く苦行像
あかあかと榛名連山加賀泊り
蟹漁の船留めといふ紅葉の乾門
仰ぎ癖つきて紅葉の乾門

大井 節子
濱名 博光
市村 一江
須川 良子
須賀 静子
星野 うらら
高橋 栄子
星野 秧子
宮崎 至夏子
斎藤 博文
増田 志津子
原田 清正

秀句鑑賞

あやとりを捌く少女ら春の雪

須川良子

外はぼたん雪。小さな炬燵を囲んで、
抹茶を飲む父と縫い物をする母。傍らで
あやとりに興じる姉妹。一人あやとり
「捌き方」を教わる妹にやさしく教える
姉。出来た時の喜び様に、皆も笑顔にな
る。妹を驚かそうと、ポンと手を打つと、
松葉の出来る姉の手に目を輝かす妹。
姉妹のいない私には憧れの情景。おだ
やかに楽しい一時を思わせる佳句。

芽吹き雨濡れても好きな庭仕事

高橋喜子

芽吹き季の庭仕事は最高に楽しい。忘
れていた花や確か此処に出る筈、と思っ
ていた花がとんでもない所から出て来た
り、はらはらとどききた。なによりも感
激するのは雪が溶けた後や、雨上りに忽
と金色の花を出す福寿草。見つけた時は
「今年も、この花を見る事が出来た」と
幸福感でいっぱいになる。

私は手袋が苦手な素手で土をいじりた
くなる。素手でいじる土の感触は脳を刺
激するの、身体中に力が湧いてくる。
作者もきつと同じ気持ちと思う。

ふるさととどろろ汁食ふ三日かな

山賀春江

我が家でも正月三日は、とどろろ汁を食
べるのが慣れであった。山芋を掘って来
るのは父と兄で、立派な山芋が取れる時
の笑顔は忘れられない。流し台と囲炉裏

が隣合せの土間がキッチンだ。とどろろ作
りは分担があり、家族が種鉢を囲んでの
団欒の時。まっ白で餅のような芋に出し
汁を注ぐと、すり鉢いっぱいにくれる
のは楽しい。母の麦飯炊けたよ。今
年も息災に暮らせますように。いただき
ます。

なつかしい昭和の時代を思いつつ。

(吉岡・吉沢美智子)

おすすめの吟行地

木曾三社神社から大正橋

前橋方面から国道17号線の下箱田の信
号を右折、県道160号を進むと左側の
木立の中、立派な鳥居が見える。木曾三
社神社だ。鳥居から70段、石段の下り参
道を進むと境内の湿原には石菖が群生。
小川を流れる水音が清々しい。本殿は、
そこから10数段石階を上った処に祀られ
ている。

群馬に木曾神社？ 由緒書によれば、

義仲が源義経に討たれた後、遣臣らが義
仲の崇拜した信濃の三社をこの地に勧請
して創建したとのこと。本殿の石階の脇
に家臣の像と義仲の三男、義基が腰掛け
たと思われる石がある。境内の奥には広
い湧泉池があり湧玉のごとく周りの砂を
巻き上げている。
大木がしげり、野鳥やとんぼ・螢・沢蟹
など生息。幾度訪れても神秘的な癒しを
感じる。

また県道渋川大胡線を渋川方面に向か
うと左側に佐久発電所がある。桜の名所
でもあり、サータンクはどこからも見

える当地のシンボルだ。道路を隔て北
橋歴史資料館。民具や古文書、近くの遺
跡から発掘された縄文土器などを展示。
公園には竪穴式住居が復元されている。

また鮎の季節には大正橋のもとに築
の職がはたたく。店の入り口では赤々と
熾る備長炭に穴々焼かれていく化粧塩の
串刺し。利根の流れを眺めながら塩塩塩の
フライ、鮎ごと料理を満喫した後、築
の卓に句座を持った。
子持鮎ほろほろこぼし齧りけり 照子
(前橋・角田はる子)

四季の畔道

利根川東岸の前橋ゴルフ場脇の桜並木
にその句碑はある。本のページをめくら
うとするブロンズの右手の彫刻がはめ込
まれた碑面には、「月天心一片の義理を
いうことなし」と彫られており、句碑そ
のものか一つの芸術作品といった感じが
する。句は、群馬大学教授で教育心理学
者だった故国沢博氏の作で、ブロンズの
手は、彫刻家の吉田光正氏が制作したも
のである。

散歩の途中に寄るようになって十年ほ
ど、句の意味を考えてきた。先日、無言
館のある信濃の前山寺に行つた際、参道
の小さな碑に「かけた情は水に流せ受け
た恩は石に刻め」と、書かれているの
を見かけ、月天心…の句と共通する「訓
(おしえ)」のようなものを感じ、句の
意味に近づいた感じがした。
月光の差し込む書齋で、ひたすら思索
にふける作者の、メッセージが込められ
ているような気がする。
(よ)

こらむ・しだりお

本県出身の講談師で人間国宝の神田松
鯉さんの十八番に『寛永三馬術』がある。
長い話だが、その中の一つ『出世の春駒』
に梅が出てくる。将軍徳川家光に命じら
れた曲垣平九郎(まがき・はいくく)の
が愛宕山の急な石段を馬で上り、梅の一
枝を手折って下りて来るといふ話▼その
石段の急勾配と、梅の花の見事な咲き
ぶりを松鯉さんはこう語る。「頂から吹
き降りてまいります初春(はつはる)
の寒風。その寒風に誘われまして、えも
いわれぬ梅花(はいくく)の香りが観郁
(ふくいく)として漂ってまいります」。

講談独特の、張り扇でポンポン叩きなが
らの一席は耳に心地よい松鯉さんは百鳥
同人。俳人協会の会員でもある。▼へ手
折らるる人に香るや梅の花)。加賀千代
女の句だ。梅は枝を折った人にも香りを
放つ。乱暴者更生させようとする落語
『天災』にも登場するが、梅は被害を受
けても、仕返しをしたり恨んだりしない
懐の深さを感じる▼桜の花見のような派
手さ。にぎやかさはないが、梅見はまだ
寒いせいかな願々くない。水戸の備菜園
は毎年のように訪れる。観光名所だけあ
って手元が行き届いており、何度行っ
ても飽きさせない。埼玉県の越生にも行
てみた。まとまって咲いているため殊
の外香りを感じた。県内でも安中市の秋間
高崎市箕郷、榛名の梅林は何度も行く
が、そのスケールに圧倒される。「梅は
咲いたか桜はまだかない」。春はそこ
まで来ている。
(M)